

ひだり手は疑ひぶかし河豚の鍋

貞勝

掲句は、作者はじめ日本人の多くは右手が利き腕であること、及び、河豚は致死性の有毒魚であり、ときおり中毒事故が報じられているということを前提とした句である。右手は食欲という本能に目が眩んで、美味しそうな河豚の一片を箸先につまんでいる。本当に無毒処理して調理されているのかという生存本能にもとづく猜疑心は、脳幹中枢に警戒信号を送るのであるが、今まさに生存本能よりも食欲本能に支配されている脳幹中枢は、右手にストップ信号を送らないのである。河豚を食べたい気持ちと、中毒事故への少しばかりの心配とがない交ぜになった、誰にでもある心理状態を、右手と左手の対立構造のなかに軽妙に活写している。「ひだり手は疑ひぶかし」は実に俳諧味にあふれたフレーズである。

寒波来るシルクロードの果ての街

与史

正倉院御物の中にはシルクロードを経て大和の国に伝来したものが収められている。まさに日本はシルクロードの東の果てに位置している国である。一国・一地域の文化文明は、その国・地域の独自性を頑なに守って進化発展したものではない。日本は、受容性に富む人智の力によって、近隣の国・地域はもとより、遙かに遠くの国・地域の思潮様式をも導入し、巧みに固有のものと融合させて来たのである。寒波は地球的規模における気団移動の現われであるが、これはあくまでも自然現象の一部であり、人智によって制御できるものではない。大いなる自然の恩沢と脅威のもとにその歴史を刻んできた大和の国の末裔の一人である作者は、日本列島を包み込む寒気団の只中において、はるかシルクロードの時代に思いを馳せているのである。格調が高く、内容の深い一句である。

一茶忌や世の底辺も支へたし

眞三

昨年来のリーマンショックに端を発して国内経済は深刻な打撃を受け、政治力のある大企業や基幹産業界はともかくとして、それ以外の各界各層においては、未だに立ち直りの兆しさえも見えない状況にある。自殺者数は依然として高い水準にあり、社会安定の根幹である中間階層の基盤崩壊もささやかれ始めている。確かに自力救済は自由主義経済の活力の根源であり、安易な救済は他力本願の怠惰な人間を温存させるだけである。しかしながら、幾ら能力と意欲があっても、一定レベルの安定収入を得る道を閉ざされている者が生まれて来ていることは、現実問題として否定することはできない。一茶忌であればこそ、作者の「底辺を支えたい」との想いはひしひしと伝わって来る。

目に泌みて焚火廻りし幼き日

幸枝

俳句は、*PRELUDE NOW*（今、此処）を詠むのが、一番良いものとされている。回想、追想の句はどうしても弱くなるとされている。回想・追想の中心にあるもの多きは、作者の個人的体験に属するものであり、他人である読み手の共感を得にくいからである。その反面、詠む手と読み手に共通した体験に根ざすものは、作り次第では、鑑賞の対象となり得る。掲句の「焚火が目に泌みた」だけでは当たり前の回想に過ぎないが、「焚火の周りを回った」と畳み掛けることによって、互選者の共感を得たのであろう。作者からの文によれば、作者はいま病の床にあるという。一日も早いご回復を祈るばかりである。

闘病中のことであれば、作者の「冬菊や点滴つなぐペンの先」の句も言いたい内容を理解することが出来る。点滴注射の針を刺した手にペンをとり、書くのに邪魔になる点滴チューブを右左に位置を移しながら、すなわち、チューブを捌きながら、ベッドの上で何かの書き物をされているのであろう。

このような状況であるとすれば、はなはだ勝手な、しかも季語を変更するという大胆な添削をもしお許し願えるのであれば、掲句は、「点滴のチューブ捌きて賀状書く」、にしたいものと思います。

婆と子の隠れん坊や冬木立

秀一

近頃は、子供同士が昔ながらの戸外遊びに興じる姿を見かけるのは少なくなった。いわんや、子供とその祖父・母が鬼ごっこに興じる風景に出会うことはほとんど稀になった。そのような時代背景であるからこそ、お婆さんと孫が楽しく隠れん坊している様子は、作者のみならず読み手にも等しく感興を与える。前句と同様に共通体験に根ざした一句である。寒々とした冬木立の一面に、ほのぼのとしたあたたかみが湧き出て来るようである。

大空は隅まで晴れし枯木立

ヤエ子

冬青空をおおらかに詠み上げたものである。一点の曇りなく、全天に及ぶ青空を形容するのにも、「隈なく」といった少し澄ましたような言い方ではなく、「隅まで晴れている」という客観写生に従った単刀直入な表現にしたのが良い。この冬青空に対峙するものとして枯木立を配置したのも、絶妙なコントラストになっており、掲句を事実在即した骨太の一句にならしめている。

凍て空を破りて離陸の米軍機

溪水

凍て空と米軍機の爆音の配合は、互いに緊張感を高め合っている、先鋭な印象の句です。

掲句では中七の部分が八音構成になっていますので、「凍て空を破り離陸の米軍機」とし、「て」を省きたいと思いますが、どうでしょうか。このようにすることによって、中七の部分が正規の七音構成となり、句としての律動感がより確かに出てくるものと思いますが。

千両の実の色つきや舟地藏

幸

単に舟地藏とあるだけでは、舟地藏の実体がどのようなものであるかは分かりませんが、これに千両の色ついた実を配されると、その地藏に秘められた歴史の一端が浮かんで来るようです。二物衝撃と言うほどではありませんが、このような句立ての効用でしょうか。

作者の「鉄の門清められ義士祭り」の句は、「くろがねの門清めあり義士祭り」として、中七で「あり」とはつきり切った方が良いのではないかと思います。どうでしょうか。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守

【安沢文枝さんの句稿のこと】

文枝さんの欠席投句の封書が旧住所宛に郵送されておりましたので、残念ながら十二月例会の互選対象に入りませんでした。折角のご出詠ですので、増田単独の選を行ない、そのうち一句を鑑賞文に加えさせて頂きました。安沢様ならびに皆様には宜しくご諒承の程お願い申し上げます。

「枯真菰月の水辺に世をすねて」、「冬の虹 2 3 程の癒し色」、「冬の日の落日音もなくゆけり」、「短日をかけ足で行く豆腐売り」、「座布団の数いくたびも冬座敷」の五句のうち、次の一句を頂きました。

短日をかけ足で行く豆腐売り

文枝

日銭商売の豆腐屋が駆け回るようにして商売に勤しんでいる。暮早いこの時期ならばこそ、豆腐売りが効いている。豆腐屋が荷台を引いて慌しく駆け回ったら、商品の豆腐が崩れてしまうかも知れないが、実景は、豆腐屋が一丁、二丁の豆腐のバックを手にして、買手のもとに急いでいるのであろうか。このほか、「座布団の数いくたびも冬座敷」の句も気になった一句である。

【冬期通信句会のお知らせ】

恒例の冬期通信句会（第九六回）を左記により行ないますので、皆様の奮ってのご出詠をお待ちしております。

記

投句数 当季雑詠・三句

投句方法 同封の投句用葉書使用

投句締切 平成二十二年二月十日

出句一覧及び選句用葉書の配布 平成二十二年二月二十日

選句締切 平成二十二年二月末日